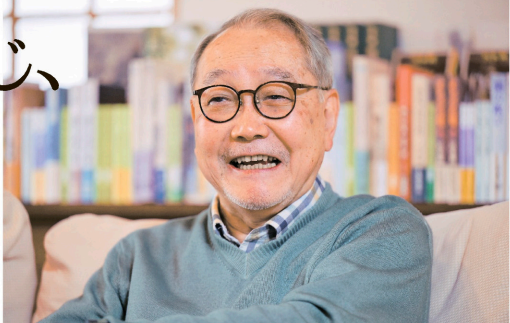


宮本輝さん初の歴史小説「潮音」 全4巻の長編を毎月連続で刊行

作家・宮本輝さんが手がけた初めての歴史小説『潮音』
（文藝春秋、全4巻）の刊行が続いている。富山の薬売り
を主人公に、幕末から近代へと推移する激動期の日本を新
たな視点から描いた長編。作品に込めた思いなどについて
宮本さんに聞いた。（2月24日付）

足かけ10年の長編
主人公の語りで



「潮音」は、文芸春秋「文芸界」2015年4月号から24年4月号まで、足かけ10年にわたって掲載された長編作品。全4巻のうち第1巻が本年1月に上梓され、4月まで毎月連続して刊行される。主人公の川上弥一は、越中富山の売薬人。激動の幕末に薩摩藩を担当し、動乱を目の当たりにする。物語は、生まれ故郷の越中八尾で来し方を振り返る「わたくし」の語りで展開していく。

「近年の『潮音』は、文芸春秋「文芸界」2015年4月号から24年4月号まで、足かけ10年にわたって掲載された長編作品。全4巻のうち第1巻が本年1月に上梓され、4月まで毎月連続して刊行される。主人公の川上弥一は、越中富山の売薬人。激動の幕末に薩摩藩を担当し、動乱を目の当たりにする。物語は、生まれ故郷の越中八尾で来し方を振り返る「わたくし」の語りで展開していく。

「主人公の『わたくし』、八尾の紙問屋・川上屋の跡取りに生まれた弥一が、なぜ16歳の時に薬問屋兼売薬人の高屋に奉公にあがったか、最初に少し思い出として語らせてフロアを終えてから第1章に入ろう。第2章までは時々、弥一の独白が入るけれど、そのほかは三人称です」と進めよう。そんなつもりで書き始めました。

結局、一人称で通した初めての長編になりました。話が安政の時代に移った明治に戻ったりして、弥一の語りだと自然に成立することができた。でも、こんなに長いものを書くとは自分でも思いませんでした（笑）。

（清国産の薬種を必要とする越中富山、五百両という借金で財政難の薩摩藩、利害が一致して手を組む両者は、蝦夷地のし昆布を欲しがる清国との密貿易を始め、琉球も加えた一大交易圏を構築しに突き進んだ。史実を踏まえつつ、弥一ら名もなき庶民の視点から時代の歩みを活写していくスタイルは新鮮だ。ペリが浦賀沖（神奈川県）にやって来た時、幕府は驚いていた以上に大きな船に見えた。向こうは大砲を備えた艦隊。馬身で屈強な男たちが整然と並ぶ。ところが幕府側とされたら、200年前の父祖の形見だいなようなものを着て、やりを持ったじいさんが、足を引くすずなりが集まっているわけだ。

遠征に見える庶民が心を動かされたのは、ペリ艦隊に対する驚きというより、うろたえ、べこべこする幕府の重臣たちの顔に立上ったのではないだろうか。「幕府って弱いなや」「徳川、たじろいんや」「これが始まったつたと思っす。」「西郷戦争では西郷軍約7000人が犠牲になりましたが、その多くが青年でした。なぜ無謀・無謀とも言える戦いで大勢の若者を道連れにしたのか、疑問に感じられて仕方のませんでした。」「歴史小説について、『うっ、か足を踏み入れたらえらいことになるぞ』と作家の先輩である池上善一さんに言われたことがあったんです。

思ってもよらない人物を扱ったことと、感じています。

激動の幕末期を新たな視点で描く

書かずに表現する存在を感じさせる

国もとの幕山では妻や子、父や母、家族が弥一たちを支え、帰りを待っています。それを文章にせず、どう感じさせるかという点は常に考えていました。その人たちの存在が絶えず弥一たちの後ろにあることを、どうやって表現しようか。

この数年、小説家でありながら「書かずに表現する」ということが自分の大きなテーマになっているんです。それががさとして浮かんできてきた気がします。

何も書いてないけれども、その背後に様々な重なるものがある。『書かずに表現する』というテーマが、弥一の物語にどうやって表現されているか、という点が自分の大きなテーマになっているんです。それががさとして浮かんできてきた気がします。

たことがあったんですが、その意味がよく分かりました。書いていくと、一つ一つの出来事が面白くて、先を進みたい。『歴史の彩りに足を取られて、出られへんようになっちゃったんです。』でも、いつか輝くやんは書くことになるやろな。できることなら幕末はやめとけよ」とも言われてた（笑）。

「弥一」は、越中富山の薬問屋の薬へ、富山の薬へ戻すことを意識しました。

「弥一になれた」美々津の港



歴史動が水底のは、名もなき民衆。宮本さんに、激動の幕末期を舞台にした『潮音』は初めて手がけた歴史小説である。

「『弥一になれた』美々津の港。越中八尾、薩摩、京都など、弥一たちの姿を併せて、風景が丁寧に描かれる。風景から物語が立ち上がるように感じるのも、宮本さんの作品に共通する滋味だろう。主人公たち、彼らを支えたつたつた越中の人々の描写一つにも、創作にかける情熱が伝わってくる。越中富山から薩摩までは約35日。弥一たちは途中、高屋藩の美々津宮崎県日向市という港町に立ち寄った。この特産品は、標で作った梅でした。日本中の船業りが美々津の梅を欲しがったそうです。思ってもよらない人物を扱ったことと、感じています。

一人の人間を救う使命を感じて

「タイトルの『潮音』とは、海の底にある潮の音。人知れぬ水底の流れのように、時代の底でも巨大な潮が静かに動いている」と宮本さんは言っている。私たちは、その動きを感じ、その音に耳を澄ませられているだろうか。

弥一が高屋屋に奉公にあがった弘化4年（1847年）頃、富山では約2000人が売薬業に携わっていたそうです。全国の人々に健康を届けるため、富山の底を食べさせるために、何十日間もかかって客さまを訪ね、薬を置く。再と感じています。

文化は
こころの
オアシス

win 一般財団法人 民主音楽協会